

遠山記念館所蔵《牡丹唐草文金襴舞樂襦袢裂》に関する研究 ——裂の製作年代と用途をめぐる一考察——

玉井あや(東京藝術大学)

遠山記念館所蔵《牡丹唐草文金襴舞樂襦袢裂》(以下、本作)は、貞和3年(1347)の墨書を有する金襴襦袢装束の貴重な遺例である。本発表では、実見調査の結果を踏まえ、墨書の妥当性を含めた裂地の製作年代の検討と、装束としての用途について考察することを目的とする。

作品名となっている襦袢は、長方形の裂の中央に首を通す穴をあけた貫頭衣式の装束で、着用時は宛帯で身体に固定する。本作は襦袢の表裂(以下、〈襦袢裂〉)と完形の宛帯から構成される。〈襦袢裂〉は、二種類の金襴をV字型の襟袷の途中で継いで一続きの布として扱い、裂の外縁には毛縁を固定していた鉸穴と見られる無数の穴が穿たれている。宛帯は、鳳凰を象った三つの円形の飾金具を施した豪華な作りで、裏地に貞和三年丁亥八月三日の墨書が記される。襦袢と宛帯の関係は、表地金襴(以下、〈宛帯裂〉)が〈襦袢裂〉とは織物構造や文様が異なる金襴であることから、当初は別具であったと考えられる。

裂地の製作年代検討は、主に墨書銘のある〈宛帯裂〉について行う。金襴は、中国・元時代において飛躍的に生産量が増加した、地色を背景に金糸のみを用いて文様を織り表した生地である。年代により織物構造に特徴が見られることから、基準作と比較することにより、製作年代推定が可能と考えた。〈宛帯裂〉の織物構造は、経四枚綾地・半越・別絡で、この三要素がすべて一致する織物構造は14世紀の作例には見いだせなかったが、経四枚綾地金襴は中央アジアの作例に、別絡金襴は貞和元年(1345)を下限とする夢窓疎石料の九条袷にそれぞれ見られ、技術的には可能であったことが窺える。半越金襴は、明時代に入って一般的となる織物であるが、現存するそれらは経糸が〈宛帯裂〉のものより細く、密に打ち込まれていることから、〈宛帯裂〉とは一線を画すと捉えた。よって、その製作が14世紀中葉まで遡る可能性があると結論づけた。

次に、〈襦袢裂〉を対象に装束としての用途について考察する。舞樂装束は、演目によって使用する色と形状が指定されている。これに寸法データを加えることで、〈襦袢裂〉を使用した演目の絞込が可能と考えた。現在、肉眼では黄色地に見える〈襦袢裂〉であるが、緯糸に退色した紅色が認められ、往時は鮮やかな橙色であったと考えられる。また、実見調査を行った東京国立博物館所蔵の中世襦袢装束4領および、日光山輪王寺舞樂装束中の襦袢装束(1636年調進)と形状、寸法を比較することにより、〈襦袢裂〉は、童舞所用の中世襦袢に近い特質を持っていると判断された。これらのことから、〈襦袢裂〉の所用は、赤系統の装束を使用する左舞で、毛縁襦袢を用いる走舞、かつ童舞が行われた「還城楽」や「羅陵王」などが考えられる。

以上のように、本作の〈宛帯裂〉は14世紀中葉以前に製作された金襴の、また〈襦袢裂〉は中世芸能装束の基準作として、極めて重要な作例であると結論づけられる。